

# 人間科学

における

# エヴィデンス

# とは何か

現象学と実践をつなぐ

小林隆児・西研——編著

竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻——著

## 「人を支援する実践」を 支えるための質的研究とは？

自他の心に気づき、言葉にし、それを共有すること——  
人間同士の関わり合いを核にもつ保育・看護・医療・教育・  
心理臨床などの営みの質の向上を目指し、現象学の原理をもとに、  
理論と実践の立場から明快に提示する。

新曜社

小林隆児・西研——編著  
竹田青嗣・山竹伸二・鯨岡峻——著

# 人間科学 における エヴィデンス とは何か

現象学と実践をつなぐ



## プロローグ

科学にはエヴィデンス（根拠）が必要です。各自の主張がどのような根拠に支えられているのかを示すことで、互いに議論しあうことが可能になるからです。そして自然科学では、実験、観察、及びそれらの結果を数学的に処理したもの（統計）がエヴィデンスとされてきました。では、保育、介護、看護、医療、教育、心理臨床のような人を支援する実践を支える人間科学も、自然科学と同様なエヴィデンスに基づくべきなのでしょうか？ そうではないでしょう。人間の「体験」の世界を理解しようとする人間科学においては、自然科学とは別種のエヴィデンスが考えられてしかるべきだからです。

この「人間科学にふさわしいエヴィデンスとは何か」という問いを、この本はテーマとしています。しかしこれは単なる認識論上・科学論上の問いではありません。むしろ「人を支援する実践に役立つような人間科学は、どのようなものでなくてはならないか」ということ、つまり人間科学そのものの性格を問うことにつながっていくのです。

この本は、竹田青嗣さん、山竹伸二さん、私（西研）という、哲学を専門とする三人（山竹さんは心理学にも詳しい）と、発達心理学者として長く保育現場に関わってこられた鯨岡峻さん、児童精神科医として発達の困難を抱えたお子さんお母さんとの臨床を長く続けてこられた小林隆児さんの、五人の論者によつ

て書かれています。

このように出自はちがいますが、この本にはすべての章を貫く共通の想いと主張がはっきりとあります。それは「人間科学と哲学を自己・他者・関係の理解に役立つものにしなくてはならない、そして臨床や支援のよりよき実践を支えるものにしなくてはならない」という強い想いであり、そして、「人間科学と哲学をそのようなものにするためには、研究者も実践者も自分自身の意識体験——とくに他者と関わる体験——をよく感じ取って言語化し共有していくことが欠かせない」という主張です。

私たちそれぞれが他者と関わる時には、他者の心の動きが感じられるとともに、それに呼応して自分の心のなかにさまざまな気持ちたちが立ち上がってきます。このような状況を鯨岡さんは「接面」と名付けていますが、この接面における自分の意識体験をいいねいに捉え返し、それを共有可能な言葉にするところからしか、自己・他者・関係の理解を育み臨床と支援に役立つ人間科学は立ち上がってこない。なぜなら、支援や臨床はまさしく自他関係のなかで展開されるものだからです。

しかし、このように自他の心を感じ取り、そこでの「気づき」を育て共有していくことよりも、すぐさま役立ちそうに見える「なすべき行動のマニュアル」を欲しがる傾向があることを鯨岡さんは指摘しています。「かくかくしかじかのようなケースに対してはこう対処すればよい」と教えてくれるマニュアルを求める声は、教育や介護の現場でも、心理臨床の現場でも大きいようです。相手の心の動きを感じ取り、それに対応して起こる自分の心の動きをも同時に感じながら相手に関わっていくというやり方は、忙しい業務のなかではしばしば「面倒くさいもの」とみなされたり、ときには「職人芸的な特殊技能であって一

般の職員には不可能なもの」とみなされたりするかもしれません。

しかし、相手と関わる経験のなかで得られるものは、単に特殊な技能ではないはずで、そこでの「気づき」を言葉でもって捉え直すことで、それをより一般性のある「メタ意味」——現象学の言葉使いでは「本質」に相当します——へと深め、同僚や他の支援者たちと共有することが可能であること、そしてこのようなやり方によってこそ、実践者が真の意味で支えを得て、よりよき実践を問い求める動機を保ち続けていけること。これが鯨岡さんと小林さんの両者に共通するモチーフです。小林さんはさらに、精神療法（心理臨床）において、治療者が関係のなかで気づいたことを言葉でもって患者に返すこと——信頼感のなかでの「気づき」の共有——が決定的な意味をもつことを主張しています。

このように、関係における気づき・言語化・共有ということが、人間科学と支援の実践にとって決定的な重要な意味をもつ、とするお二人の姿勢は、現象学の始祖フッサールが求めた学問のあり方（本質学）と深く共通するものです。

自分自身のある種の意識体験を捉え返すことで、それらの体験に共通し核心をなすもの（本質）を言葉でもって取り出してみる（本質観取）。すると、その言葉を受けとった他の人はその人自身の意識体験を反省することで、その本質観取に妥当性があるかどうかを吟味することができます。このようにフッサールは「自分自身の意識体験の反省」というところにエヴィデンス（明証性）を求めましたが、この本で、竹田・山竹・西の「哲学組」はこのフッサールのエヴィデンスの考え方を人間科学に拡張することを試みています。

現象学の方法において、エヴィデンスとともに重要なポイントになるのが「本質」の理解です。現象学という本質については、これまで「永遠不変な真理を求める古い形而上学だ」という非難が数多く寄せられてきました。しかし本質とは決して永遠不変な真理ではなく、私たちがよりよき実践や生のあり方を希求するからこそ問い求められる「共通了解」であることを、この本では強調しています（竹田さんは本質とは「正当性のある合意」であると言い切っています）。そしてこの本質観取の方法が哲学と人間科学に共通する基礎的な方法であり、そして哲学と人間科学とはまったくの別物ではなく相互に連動すべきものであることを山竹さんは強調していますが、これも三人に共通する姿勢といえます。

\*

さて、ごく簡単に各章の見取り図を描いておこうと思います。

第1章（竹田）は、「自然科学のエヴィデンスと人間科学のエヴィデンスのちがいの問題」が、近代ヨーロッパの学問における「主観・客観一致の難問」にまで遡るものであることをまず指摘します。そのうえで、学問の客観性とは客観世界との一致ではなく、じつは「共通了解をどうつくりあげるか」という問題であることをフッサール現象学にもとづいて明快に示します。そして、「人間科学が共通了解を達成するためにどうすればよいか」という問いに対しては、本質観取の方法を提示しています。この本全体にとって、原理論的な位置をもつ章といえます。

第2章（山竹）は、質的研究の歴史を詳しくたどって、わかりやすい見取り図を示しています。そして、そこから生まれたナラティブ論や社会構築主義がいくつかの革新を成し遂げたことを評価しつつも、それ

らが共通了解をつくり出す原理をもたないこと、それに対して、現象学は本質観取の方法によって共通了解を作り出しうる点で質的研究にその原理を与えうることを主張しています。そして人間科学的な個別研究と、哲学的な普遍的な研究とが相互に連動するイメージを提示しています。

第3章(西)は、フッサールに立ち戻って「本質」及び「本質観取」の原義を確かめたうえで、本質を永遠不変なものとしてではなく、何らかの必要や観点によって問い求められるものとみなすべきことを主張します。続いて本質観取の実例を「なつかしさ」を例にとって行うとともに、人間科学のエヴィデンスは「体験反省的エヴィデンス」(体験を反省することによって確かにそうだと思えること)に基づくべきことを主張しています。

第4章(鯨岡)は、これまでの哲学的な論究とはちがって、子育てや保育のような具体的な実践の現場からスタートします。人と人との関わる場面を、情動や力動感が通いあう「接面」と呼んだうえで、この接面を無視する「客観主義的パラダイム」と、接面で起こっていることを積極的に取り上げて深めようとする「接面パラダイム」とを区分し、それぞれの特性を明確に示します。そしてこの二つのちがいが具体的な実践においても大きなちがいを生むことを鋭く指摘しています。さらに、人間科学におけるエヴィデンス(明証性)を「エピソード記述」に即しつつ述べていきますが、これは第3章で私が「体験反省的エヴィデンス」として抽象的に述べたことを、より具体的に発展させるものとなっています。

第5章(小林)は、鯨岡さんのいう「接面」を、心理臨床の現場からきわめて具体的に描いています。対面している子どもの心と同型の「力動感」が自分(医師)のなかにも立ち上がる。そうした力動感が相手の心を捉えるうえでもっとも基底のものである(いわば第一次的なエヴィデンスである)こと。それを言



葉にして相手に返すことによって、相手の気づき（自己了解）が促進されることが心理臨床の核心であること。両者のやりとりのなかで、自分の捉えた感触が確かなものであったかどうかが最終的に確かめられることになるが、これが最終的なエヴィデンスといえること。このように心理臨床の原理とエヴィデンスとを、とくに「甘え」という二者関係の核心というべき事柄に関わりながら示しています。

\*

このように「人間科学はどのようなエヴィデンスをもたねばならないか」という問いは、じつは、人間科学のあり方と、そこから導かれる支援の実践のあり方を問うことでもあります。この本からはさまざまな発展がなされうと思います。心理学や教育学、また、看護、介護、医療のような支援の実践についても、もちろん哲学についても。

私自身のことをいえば、私はフッサールから出発して、さまざまなテーマについて本質観取のワークシヨップを行ってきましたが、より生々しい「二者関係」のなかで働く力動感や情動性については、小林さんと鯨岡さんに深く教えられてきたと感じています。

この本がさまざまな方々の手元に届き、大きなヒントと刺激を与えてくれることを祈っています。

二〇一五年八月

西研

プロローグ

i

西研

第1章 人文科学の本質学的展開

1

竹田青嗣

第1節 人文科学の危機

1

第2節 認識問題の解明と本質学

11

第3節 本質観取とは何か

22

第4節 本質学と解釈学

30

第5節 近代社会の理念的本質について

42

第6節 実践領域への現象学的適用

52

第2章 質的研究における現象学の可能性

61

山竹伸二

はじめに 自然科学に人間の解明はできるか？

61

第1節 質的研究の理論と問題点

66

第2節	質的研究としての現象学	84
第3節	人間科学と現象学的方法	101

### 第3章 人間科学と本質観取 119

.....

西 研

はじめに 現象学的な人間科学とは？ 119

第1節 フッサールの構想——反省的エヴィデンスと本質について 125

第2節 本質観取をどう行うか——なつかしさの本質を事例として 145

第3節 本質観取と人間科学 166

### 第4章 「接面」からみた人間諸科学 187

.....

鯨岡 峻

第1節 「接面」という概念に行き着くまで 188

第2節 接面 194

第3節 客観主義パラダイムと接面パラダイム 202

第4節 明証的（エヴィデント）であることをめぐって 211

第5節 接面パラダイムの素朴な認識論 222

第6節 結びに代えて 227

第5章 精神療法におけるエヴィデンスとは何か 229 ..... 小林隆児

第1節 自閉症にみられる独特な知覚体験——原初的知覚 231

第2節 常に変化し続ける現象をいかにして把握するか 238

第3節 乳幼児期の母子関係にみられる「甘え」のアンビヴァレンス 243

第4節 臨床精神医学における症状や徴候の成り立ちを考える 252

第5節 精神療法においてアンビヴァレンスはどのように現出するか 256

第6節 精神療法におけるエヴィデンスとは何か

——「あまのじゃく」という関係病理を生み出したプロセスを振り返って 263

エピローグ 273 ..... 小林隆児

索引 (1)

装幀◆新曜社デザイン室



## 第1章

# 人文科学の本質学的展開

竹田青嗣

## 第1節 人文科学の危機

わたしは大学だけでなく、カルチャーセンターなどでも長く現象学の講義をもってきましたが、このところ、看護や介護など医療、福祉実践の分野に携わる方々が現象学に興味をもつて受講されるということがとても多くなっています。その原因は、この医療、福祉実践の領域で、エヴィデンス主義にもとづく量的研究と質的研究との対立という事態が生じ、とくに質的研究に興味をもつ人たちにとって、現象学が一つの重要な方法的リソースになっている、ということがあるようです。

量的研究は、いうまでもなく実証的な科学主義の立場に立つもので、さまざまな現場での臨床データの

広範な定量的分析を基礎とします。これこれの事態に対してこれこれの対処を行ったときどのような結果が現われるかについての明確なエヴィデンスが柱となる。これに対して質的研究は、必ずしも量的データに依拠せず、むしろ諸ケースについて、意味的分析あるいは解釈というものを研究の基軸におきます。一般的にいつて、人文科学「E」の領域では、この実証的、科学的な方法とそれについての意味論的な分析や解釈という二つの契機は互いに支えあうものといえるけれど、現実には、エヴィデンスベーストな量的研究がこの分野で主流であり、後発の質的研究の方法に対して、それが実証的、科学的でないという批判が強くなる。しかし、質的研究は、むしろ理論的な場所ではなく実際の医療実践の現場にいる人たちにとつて、個々のケースをどう理解しどのように実践を推し進めていくかという点で一つの優位性をもっており、そのために近年、質的研究が注目され始めているわけです。

わたしはこの領域の専門家ではなく、そのような医療実践の領域の問題をいわば徐々に聞き知ったわけですが、しかし哲学的立場からみて、この事態には、フッサール現象学のそもそもの動機と方法、そして現代哲学全体の動向と深くかかわる重要な問題が横たわっているようにみえます。まずそのことから話をはじめようと思います。

### 「近代自然科学」の確立

哲学史の領域において、一九世紀の半ば以降、やはり実証主義的な科学主義の方法と哲学的な本質洞察の方法との大きな対立が生じてきました。ことの起こりはオーギュスト・コントの哲学批判です。コントは一八四四年の『実証精神論』で近代哲学の基本方法を「形而上学的」思考方法として批判し、人間の世

界認識の根本方法は、いまや形而上学的方法を脱して実証主義的な認識方法へと進みでなくてはならない、と主張します。仮想敵はヘーゲルにおいて頂点をみたドイツ観念論です。カント、フイヒテ、シェリングなどを含めた彼らの基本の世界観が、スピノザ以来のヨーロッパ独自の理論—汎神論的世界観の枠内にあったことを思うと、コントの批判はきわめて理に適ったものと見え、科学的な合理性を重んじる新しい世代の知識人からの共感を得ることになります。

形而上学の根本方法は、世界の根本原理、究極原因を探索するという点にあるが、これはそもそも不可能である。実証主義は、客観認識を生み出す実証的な自然科学の方法にもとづき、絶対的な認識を求めず、人間が必要としている知識を一定の限定において、すなわち共通理解が成立するような範囲内で探求するものである……。コントのこの哲学批判は、ドイツ観念論哲学が世界精神としての「絶対者」という観念から離脱できず、精神と自然との調和的一体性などをロマン的な仕方でも主張していたことをかんがみると、きわめてまっとうなものといえます。コントの構想では、近代が創り出した合理的な学問の精神は、実証主義的方法によってついにその完成形態へ達すると思えられたのです。しかし事態はそう簡単ではなかった。

これは十分注意すべき点ですが、ヨーロッパの近代自然科学の方法は、世界ではじめてうち立てられた厳密な客観認識の方法です（あくまで自然世界についての）。後にフッサールは、この近代自然科学の方法

「1」人文科学は科学の大きな分野として自然科学に対立する。この意味での人文科学は、さらに社会科学と人間科学とに区別される。この人間科学を人文科学と呼ぶ場合もある。



の本質を、「自然の数学化」という言葉で見事に規定しました。近代自然科学は、あらゆる自然現象の生成変化について、その構造と因果の法則を、厳密に数学化された相において捉えることを可能にし、そのことよって計量、計測のみならず、あらゆる点に関して因果的予測を可能にするという驚くべき方法を確立したのです。

この事態は科学者のみならずヨーロッパの多くの哲学者、思想家に決定的な衝撃を与えました。すなわちそこに現われたのは、この科学の客観的方法を適切に展開、発展させてゆけば、自然世界のみならず世界のあらゆる問題や事象に関して、やがて遠からぬ未来に、人間は完全に正しい世界認識に到達することができるであろう、という期待に満ちた観念です。一九世紀には、一七世紀についてヨーロッパにもう一つの大きな科学革命の波が起こります。一九世紀の物理学者ラプラスの「ラプラスの悪魔」という言葉はよく知られていますが、これは、ある瞬間の世界の物理的状态の一切が知られるなら、それ以後の一切の世界の変化の状態を予測できるはずだという考えで、一九世紀の科学者や思想家たちが科学の方法に抱いていた大きな希望を、きわめてよく象徴しています。

こうして、コントの実証主義精神の提唱は近代の社会科学の考え方の基礎となり、それまで人間と社会の問題を一手に引き受けていた哲学に代わって、一方でマルクス主義が現われ、一方で、デュルケームやウェーバーなどの社会学が登場してくるようになります。マルクス主義が、自らを科学的認識とみなし、また唯一の正しい世界観と標榜したことはよく知られていますが、新しい実証主義の方法が、人間と社会の認識についての正しい認識方法をもたらすはずだと多くの人々が考え、マルクス主義はまさしく自らがそのような認識方法であると標榜したのです。しかし、事態はそう一筋縄ではいかなかった。

### 学派の乱立と対立

その後、新しい人文領域における実証主義的諸学科が雨後のたけのこのように立ち上がってきました。心理学、社会学、歴史学、経済学、人類学、言語学、政治学、芸術学等々。そこでどういうことが生じたか？ この新しい人文諸学科においてすぐに見出されたのは、自然科学におけるような広範な共通認識、客観認識についての合意が現われず、むしろあらゆる諸学科において複数の学説の乱立と異説の対立が露わになる、という事態でした。それを最もよく象徴するのが心理学です。ここにはざっとながめるだけでも、実証主義的心理学と深層心理学との対立があり、深層心理学においては、フロイト派とユング派、さらにフロイト派からさらに自我心理学、関係対象派など無数の分派が現われます。また実証主義的心理学においても、内観主義、機能主義、行動主義心理学、ゲシュタルト心理学、認知心理学等々の消長が続きました。そしてこれに類する事態が、心理学の領域だけではなく、あらゆる人文科学の諸学科にみられる現象として現われてきたのです。

要するに、自然科学の実証主義的、定量的方法を適用することによって、厳密な認識をうち立てられると期待された人文諸科学において、どの分野でも学派の乱立と対立ということが普遍的な現象となり、それは現在もまったく変わらず続いているのです。つまり、自然科学の実証主義的方法を適用すれば、人文科学の領域にも厳密で正しい客観認識が成立するだろうという一九世紀の実証主義的予想は完全に覆されました。しかもこの事態がなぜ生じているのかについて、どんな有効な考え方も見出されていない、というのが現状なのです。人文科学の領域においてはたして広範な共通認識（客観認識）が可能なのかという問題は、現在では科学哲学における認識論的論争として続いており、二〇世紀の半ばに行われたアドルノ、

ホパー、ハーバーマスなどを巻き込んだドイツの社会科学における実証主義論争はそれを代表するものです。

### 実証主義への異議申し立てと「認識の謎」

さて、少し遡って、このような実証主義の大きな波に対して、もう一方で哲学の領域からリアクションが現われます。つまり、実証主義的な科学主義の方法では、人間や社会における意味や価値の問題を正しく扱えないのではないかという異議が、哲学の新しい潮流として登場します。それを象徴するのが、一九世紀半ばの新カント派、とくにヴィンデルバントやリッケルトの西南学派、またディルタイなどの哲学者です。彼らは、実証主義的方法では社会や人間の領域の本質的事象については迫れないとして、自然科学に対して精神科学や文化科学というカテゴリーをおき、これに対抗する方法を模索しました。少し遅れて、フッサール現象学もまたそのような哲学的モチーフを継承しつつ登場してきます。

これについては、中期の『現象学の理念』<sup>〔2〕</sup>と後期の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』<sup>〔3〕</sup>がきわめて重要な著作です。まず『現象学の理念』でフッサールがおいたマニフェストを簡単に要約してみます。

『現象学の理念』でフッサールは、人文科学の認識が陥っているこの混乱の根本の原因は、ヨーロッパ哲学に長く続いてきた認識問題、「認識の謎」が解明されていない点にある、と主張します。ヨーロッパの認識問題とは、主観―客観の一致問題とも呼ばれますが、デカルトの主観―客観の一致は論理的に決して検証されえないという主張に端を発します。その言い分はこうです。人間が形成する一切の認識は、それ

がどんなものであれ、つまるところ主観の認識である。認識する主観が複数でも事態は変わらない。神のような完全な認識があるとすればつだが、われわれ人間の認識は、どこまでも自分の認識を客観存在それ自身と参照することができず、したがってその「正しさ」を確証することはできない。それゆえ人間の認識は、原理的に対象それ自体を把握しえない……。

ふつうにいえばレトリカルな謎にすぎないように思えますが、近代哲学の認識論では、この主一客の一致の不可能性というテーゼは、カントによって「物自体」の認識不可能性として示され、さらに認識における「超越論」的問題として定式化され、誰も突き崩せない強固な難問として現在まで生き続けているのです。

### 「本質学」としての学問の危機

さて、「認識の謎」とは、この認識における主一客一致の不可能性を覆せないことで現われる認識上の難問です。第一に、主一客一致が不可能ならそもそもどんな「正しい認識」も存在しえないし、もちろん哲学的真理ということもありえないことになる。哲学的な相対主義、懐疑主義といわれるものは、原則としてこの立場です<sup>[4]</sup>。第二に、主一客の一致がありえないなら、自然科学が作り上げてきた自然の客観

[2] 邦訳に『現象学の理念』（立松弘孝訳、みすず書房、一九六五）（長谷川宏訳、作品社、一九九七）がある。

[3] 邦訳に『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、一九九五）がある。

[4] 現代のポストモダン思想や分析哲学は、基本的にこの論理相対主義を基本の方法としている。この意味で現代は哲学的には相対主義の時代だといえる。